



それぞれの「豊かさ」の実現に向けて

短期東南アジア実習

明治大学農学部食料環境政策学科 2年

阿部 慶子

私は2週間、タイ北部の都市チェンライ近郊に暮らしているアカ族とカレン族という山岳民族の村にホームステイしました。アカ族の村では、水路づくりと子供たちに日本文化を伝えること、カレン族の村ではトイレを作ることに取り組みました。これらの取り組みと並行して、両民族の農業や食文化、民族衣装などの文化について学び、視察も行いました。



カレン族の村人と（前列中央が筆者）

滞在中は、毎日が発見・驚き・感動の連続でした。その中でも、人々との交流が一番印象に残っています。アカ族の村では、子供たちと広場や川で一緒に遊びまわりました。子供たちは、言葉が伝わらなくても「ピーケイコ！（ケイコお姉さん！）」と呼んで慕ってくれました。その子供たちの声と笑顔が今でも忘れられません。カレン族の村では、村の人々がタイ語を教えてくださいました。ノートを抱え、たき火を囲み、英語、タイ語、日本語を織り交ぜたコミュニケーションはとても良い思い出です。帰り際に「またあいましょう！」「I love Japan!」と言ってくれた時には泣きそうになりました。



アカ族の伝統的な家

村の生活は日本と比べると、決して「便利」ではありません。しかし、素敵な笑顔と優しさを持つ村の人々は、おいしい食事を家族と食べ、自然に囲まれて生き、文化を守りながら「豊かな」生活を送っています。日本と村の豊かさを比べることはできませんが、「便利≠豊かさ」が成り立つことを知りました。同時に、「『豊かさ』の正体とは？」という疑問も生まれました。



建設に取り組んだ水路

私は将来、貧困問題の解決を目指す活動に携わりたいと考えています。その目標に向けて、「豊かさ」について考えることが必要だと実習を終えて強く思うようになりました。今後、地球に住む人がそれぞれの「豊かさ」を得るためには何が必要なのか？を自分なりに追求していきたいと考えています。

この実習をサポートしてくださったミラー財団、先生方、村の人々、友人たちに心から感謝しています。今度はタイ語を話せるようになって、ミラー財団や村に顔を出しますね。コップンカー！



インターンシップの様子